第三世界と民衆文学

韓国文学の思想

金学鉉 編訳

社会評論社

需要全本请访问www.ertongbook.com

第三世界と民衆文学

韓国文学の思想

金学鉉●編訳

社会評論社●

金学鉉（キム・ハクヒョン）

1929年韓国原州生まれ。
ソウル大学中退，日本中央大学大学院博士課程修了。
現在桃山学院大学助教授。
著書
『荒野に呼ぶ声』（柘植書房）
編訳書
ジョン・C・H・ウ『東西の彼岸』（中央出版社）
宋敏鎬『朝鮮の抵抗文学』（柘植書房）
成錫憲『苦難の韓国民衆史』（新教出版社）ほか

第三世界と民衆文学　©1981　0030-81127-3351

1981年10月25日　初版第一刷発行

編訳者　金学鉉
装　幀　貝原浩
発行人　松田健二
発行所　㈱社会評論社
　　東京都文京区本郷2-5-10　電話03-814-3861
印　刷　㈱太平印刷
製　本　㈱東和製本
定　価　1800円

第三世界と民衆文学——韓国文学の思想——

まえがき

本書には、今日の韓国の文学評論家および詩人による五篇の文学評論と二篇の講演記録が収められている。もとよりこれらの諸論稿が今日の韓国文学の代表的な文学についての考え方を述べているとは言えない。しかし少なくとも一九六〇年の四月革命以後、七〇年代の政治的、社会的波瀾の過程で生まれるべくして生まれた、文学の在るべき、確かな方向性を示すものであることは言えるのではないかと思う。

四月革命という歴史上初めての、学生を中心とする民衆のたたかいは、鮮血の中に新たな歴史の創造への確かな里程標を打ち立てたのであった。革命後、文学の分野でもそれまでの不安・憂うつ・無力感を吹きとばすかのように、新たな創作活動が力強く展開されていった。「四・一九」世代といわれる詩人たちが現われ、文学の「現実参与」が熱っぽく論じられた。リアリズム文学論、市民文学論、植民地時代の文学論、農民文学論、民族文学論、民衆文学論など、まさに文学論の百花燎乱の時代へ進んでいた。しかし一方の政治社会では、クーデターによって政権を掌握した軍事政権のしめつけは次第に厳しくなっていき、六〇年代後半から七〇年代末にかけて文学者・宗教家らを中心とする民衆の抵抗は激しい民主化闘争となって現われ、その間、多くの犠牲者がでた。民主主義回復、南北統一という民衆の悲願はいわばこの時代の「時代精神」であった。

需要全本请访问 www.ertongbook.com

危機状況の中で、諸々の文学論は「民族文学」の新たな概念の下に収斂され、いっそうリアルに民衆の生活を描く、「民衆文学」として方向づけられていった。苦難の中で確かな思想は生まれるものだろうか。この時代、韓国文学は金芝河という予言者的な詩人の存在によって世界の注目するところとなり、その世界性が問題になった。ことに、第三世界文学との共通点がとりあげられてきたことは、韓国の現状からして極めて当然のことであった。近代文学の流れは、植民地時代の模索、解放後の南北分断、対立の中での混乱、四月革命後の燎乱、七〇年代の収斂という過程を経て、いまふたたび「沈黙の時代」を迎えている。

なお、翻訳にあたって、注に関しては、訳注の短いものは文中に〔　〕で入れ、長いものは巻末にまとめた。

金　学鉉

第三世界と民衆文学　目次

まえがき　ⅱ

植民地文学の清算　廉武雄　7
近代的民族文学の課題

言語・文学・イデオロギー　李哲範　25
新しい民族文学の問題提起

詩人における四・一九革命　高銀　43

韓国文学と第三世界文学の使命　白楽晴　59

民族文学の行方
その民衆的視角　高　銀　87

第三世界と民衆文学　白楽晴　123

純粋な言語と切実な言語　梁性佑　185

申采浩と民衆文学
解説にかえて　金学鉉　201

訳注　221
筆者紹介　231
民主回復を渇望して——本書の出版によせて　徐龍達　234
あとがき　236

「植民地文学の清算」

近代的民族文学の課題

廉武雄

ああ、いずこより来たる燦爛たるあの光
東の空は薔薇色に彩り
千尋万尋の深い海底に
長い夜の暗闇に身もだえつつ
たぎる情熱を胸の内に積もらせ

家ごと軒下に太極旗はためき
街ごと地軸を揺るがす喊声
きょう　この国の山河は　大きく笑った

八・一五解放の感激と喜びを、ある詩人はこううたった。そしてこの作品が収録された『解放記念詩集』（一九四五年一二月刊）の序文で、李軒求（イホンク）〔文学者〕は「太平洋戦争が起こる一、二年前から彼ら〔日帝〕は民族文化抹殺の最悪の行動をくりひろげるため、死力をつくして朝鮮文学全滅運

需要全本请访问 www.ertongbook.com

動にとりくんだ。言論機関は閉鎖され、ハングル〔韓国語〕運動を弾圧し、ついには創氏制度〔日本式氏名に強制的に変えさせる〕という人類史上類例のない野蛮な政策を行なってまで朝鮮民族の文化をなくそうとした」と、怒りに満ちた語調で回顧しながら「いまやわれわれは、美しくない過去を焼却して、われわれの血管の中へ流れ込んでいた、その不純な血の元素をすべて洗い清めて、われわれの心の鏡は一点の汚れもなく再生する祖国の光復のみを映して見るべき」だと強調した。しかし、その感激の日からいつのまにか三〇年近い歳月が過ぎた今は、われわれは改めて問い、考え直すようになった。東の空をバラ色に彩りながら訪れたあの燦爛たる光の正体は何であったのか。われわれの血管の中へ流れ込んでいた不純な血の元素をわれわれはすべて洗い流してしまったのか。そして、いまや〔日本と〕新しい関係に入った今日の民族的現実を、一点の汚れもない淡々とした、堂々たる心境で眺めることができるだろうか。

人によってはこういう質問を気まずく思い避けようとするだろうし、また、人によっては四半世紀にわたる政治的独立の経験に過度の意義を与えようとするかもわからない。しかし筆者としては、こういう質問にたいして決してある肯定的な答えをしめすことはできない。したがって、日帝植民地時代にたいするわれわれの関心は、まだ依然として歴史的であるより、現実的な次元で提起されるのである。

一

六〇年代以後、わが国の学界で最も活発に論議され、またかなりの成果を収めた問題は植民地史観を克服することについてであった。この問題は具体的に朝鮮王朝後期における資本主義萌芽論に集約されたのであるが、これに関連するいくつかの学者たちの重要な労作が発表されたものと知っている。国史研究を中心とする学界のこうした動きは、直ちに文学研究に影響を及ぼし、わが国の文学史を新しい角度から解釈しようとする試みとしてあらわれるようになった。それが最近文壇の一角でしばし論議された、いわゆる近代文学起点論というものである。その要旨は大略つぎのとおりである。

いままでは韓国文学史において近代文学の出発点といえば、だれもが当然のように甲午更張〔一八九四年の政治制度改革〕以後、李人稙（イインジク）・崔南善（チェナムソン）・李光洙（イグァンス）のいずれかの人からはじまるのが普通であった。ところが周知のように、この人たちは日本を通じて、日本化された西洋文学を学んだ人たちであった。したがって、この人たちを韓国近代文学の創始者とみなすことは、すなわちわが国の近代文学が外国から輸入されたものだということを認めることだと考えられたのであり、したがってそれは主体性を失った植民地的思考方式としてみなされたのである。こうしておのずから外国文学が輸入される以前に、ある民族的な近代文学が自生的に成長していただろうという推

論を生み、それが六〇年代以後史学界の業績に力を得て、近代文学の上限線を一八世紀の実学時代までさかのぼらなければならないという理論を生み出したのである。

もとより、これはまったく新しい試みではない。以前に金台俊（キムテジュン）は『朝鮮小説史』（一九三九年、文庫版）で、なんら概念規定もないけれども、いずれにせよ近代小説という名で英正時代〔李王朝の英祖・正祖時代のおよそ八〇年間、一七二四～一八〇〇年〕の小説を概括した。また李明善（イミョンソン）は『朝鮮文学史』で、執権的両班（ヤンバン）〔李朝の文武両特権階級〕官僚にたいする猛烈な反封建的批判者としての朴趾源（パクチウォン）〔訳注1〕を「朝鮮文学近代化の巨人」と高く評価したし、特に『春香伝』については、「おそらくこれが近代小説としては封建的諸制約を脱して、新時代への発展を目標に到達し得る最高の境地であり、またこれはそのまま現代の長編小説ともよく通じ得る最後の成果であろう」として『春香伝』の一定の近代文学的意義を指摘した。筆者自身もこれと似た観点で言及したことがある。

しかし総体的にみて、一八世紀のわが国の文学は朝鮮王朝の封建体制が崩壊する時期の産物であることは明らかだが、みずからの中世的母胎を突き破って新しい時代に向かって飛び出した文学だと規定することは難しいと思われる。このことは、その時代の文学における近代的要素を否定しようとするものではない。一時代の文学が近代的要素を否定できないほど自身の中に成熟させたことと、文学史の時代区分上、近代文学に属するということとは、厳密に区別される問題であるからである。この時代の社会と文学を筆者自身、一次資料によって深く研究してみなかったので、自信をもって言い切ることは難しいが、他の研究者のいくつかの業績をもとに判断すれば

そうだというのである。例えば、李明善が前に掲げた本で、朴趾源の『許生伝』について「朝鮮の商業資本が官僚に依存する御用商人の性格を最後まで脱しきれず、したがって正面から鋭く両班官僚と対立して行く革命性を持てなかったので、『許生伝』でも商業問題が大きく前面にあらわれたにも拘わらず、未来性ある新しいタイプの商人が最後まで登場し得なかった」と論評したことだとか、朝鮮王朝後期の長時調（シジョ）〔訳注2〕にたいして高晶玉が「要するに長時調というのは庶民階級が両班階級の律文文学を相続し、それを自分たちの文学につくろうともだえた苦悶の文学であり、失敗の文学である」（『古長時調選注』、一九四九年、文庫版）と規定したのは、結局その時代の社会と文学があらゆる近代的な内的成長にも拘わらず、いまだ封建中世的限界を突き破れなかったことを証明するものである。しかし、この時代において、農民階級を主軸にして進歩的没落両班といくらかの商人層を含む広い意味の平民階級がはたした役割と成果は、真の民族的近代化の不可欠な前段階をなすもので、大きな歴史的意味をもつといえよう。

二

一九世紀後半のわが国の歴史は、民族の主体的近代化のあらゆる通路が、強大な外国資本主義勢力によって武力的に閉鎖される過程として理解される。世界史的にみて西欧の資本主義諸国家

は英国を先頭走者に、順次に自己の産業化を完成し、独占化の段階に差しかかり、これにともなって、これらの国々は国内の経済的諸矛盾を打開し、低下しはじめた利潤率を補うために、豊富な原料資源と新しい資本投下市場として植民地を求めて躍起になった。これがすなわち西勢東漸であることは周知のとおりである。そして、地表上のすべての人類は、全地球の植民地的大分割、全世界の資本主義的単一市場が輪郭的に完成されるにつれて、歴史上はじめて単一の連関性の中に立たされるようになった。純粋にこういう点からだけみるとすると、それは人間という種族の歴史において、実に画期的な意義を持つ一つの巨大な発展といえるかもしれない。

しかしともあれ、わが国は独自の政治的、社会的、文化的伝統を持つ多くの後進国と一緒にその伝統が強圧的に否定され、一介の植民地の位置にころげ落ちてしまった。一九世紀後半の数十年間、わが国では執権的封建両班と農民大衆勢力との間で、土着的民族資本と外来資本との間で、現状維持を望む保守派と現状打破を望む改革派との間で、そして個々の国内政治派閥ならびにそれぞれの帝国主義的外勢の間で、その時その時の客観情勢に応じての勢力の消長と浮沈が繰り返された。しかし基本的には、民族の伝統と民衆の利益に基づく主体的陣営が、日本帝国主義およびそれと結託した反民族的植民主義の武力と資本と奸計によって、間断なく萎縮されて行く過程を露呈した。この過程を最も集約的にかつ総体的にしめした民族史的一大事件は、いうまでもなく東学農民戦争[訳注3]である。一八世紀以後あるいはずっと以前から封建主義を清算し、新しい時代の理念を実現するために蓄積され準備されてきたすぐれた民族的エネルギーは、近代的に強力に武

装された日本帝国主義の軍隊によって完璧に敗北し、掃蕩されてしまった。そしてその廃墟の上に、西欧資本主義的政治・経済・文化は歩武堂堂と進入してきたのである。

わが国におけるいわば近代文学というものは、その自主的萌芽が自己の母胎で完全に成熟する前に、このように頑強な弾圧を受けて枯れてしまい、日本をつうじて西欧的な概念と形態の文学が輸入されることによってはじまった。「新文学の西欧的な文学ジャンル（具体的には自由詩と現代小説）を採用しはじめて形成され、文学史のあらゆる時代が外国文学の刺激と影響と模倣によって一貫されたといっても言い過ぎでないほど、新文学史というものは移植文化の歴史だ」という、ある論者の主張は、それが自己批判の一環として提起される限りにおいて一定の妥当性を持つといえる。この移植文化という言葉についてわれわれはある種の感傷的、観念的な誤解をしてはならないだろう。すなわちわれわれは一九世紀以後の歴史的現象にのみ執着して、わが国の文学が移植文学であり模倣文学であるとだけ断定してもいけないし、また、感傷的な愛国主義にしがみついて、わが国の文学が自生的な、民族の純粋文学だと強情を張ってもいけないだろう。それは事実を正しく認識していないだけでなく、事実を歪曲することでもある。万一われわれが、一九世紀以後の文学史をたんに移植文学史としてみるにとどまるなら、それこそ一民族としての独自の生命力を否定することになり、植民地的文学史観にとらわれているといわざるをえない。一人一人の個人にしても他人と混同されえない独立性を持っており、またある一人の人間の考えでさえ他人にそのまま伝授されるのが難しいことなのに、どうして一民族の文化が他民族にその

需要全本请访问 www.ertongbook.com